

週 報

「信じます。

不信仰なわたしを、
お助けください」。

(マルコによる福音書第9章24節)



人と神、人と人をつなぐ難しい働きをしています
日本基督教団 西宮公会教会

〒662-0834

兵庫県西宮市南昭和町 10-22

TEL 0798-67-4691

FAX 0798-63-4044

郵便振替 01170-3-4901

ホームページアドレス

<http://www.koudou.jp/>

電子メールアドレス

koudou@gamma.ocn.ne.jp

小さな手大きな手

東電福島事故については、「つづく」となり、その東電が、大事故であるにもかかわらず、柏崎・刈羽を「再稼働」させる事に、強く違和感を覚えています。もちろん「つづく」のですが、2025年1月1日の教会礼拝で2024年の10冊の本を紹介したように、2025年の10冊を紹介することにします。ただ、福島について繰り返し言及する「チェルノービリ・マニュアル」(ケイト・ブラウン、緑風出版)などは別に紹介することになります。

昨年、亡くなられた知らせを受けながら、訪ねられなかった草鹿平三郎さんの「墓前に」と思い、5月に北海道紋別まで出かけることになりました。

何度も、何度もお世話になった、草鹿平三郎さんのお宅には、何本かの本棚があって、本で埋まっていました。お訪ねして、「記念に」ということで、2冊の本をお預かりすることになりました。

1冊が「わだばゴッホになる」(日本経済新聞社)、もう1冊が今西錦司の「私の自然観」です。今西は、京大探検部の草鹿さんの先輩であり、紋別で「牛飼い」として生きる時の、「私の自然観」に書かれている自然の営みは、今西とそれと通じるものがあつたはずですが、棟方志功との出会いは、何だったのか、お聞きする機会もありませんでしたが、木の「板画」、木版に徹底してこだわった棟方志功は、草鹿さんの「牛飼い」、真冬の朝の光の中で、白い息をはきながら牧草を食べる牛たちの体をなでるようにブラシをかける姿と、その肉体、精神においてどこかつながっていたのかも知れません。

そして、「奇跡」のように起こったのが、その棟方志功の「板画」「耶蘇十二使徒板画柵」12枚を、西宮公会教会が預かることになったことです。

「死闘伊江島戦」が、新里堅進の「漫画作品」との最初の出会いです。沖縄戦を生きた「証言」を、直接聞かせてもらうことになったのは、2015年2月、その頃はキャン

プシュワブゲート近くのフェンス横に、張られていたテントでの「ふみこ・ばあ」の証言でした。それは「証言」そのものでしたが、10年近く経った、新里堅進の「漫画」の「証言」は、先へ読み進みにくい「証言」のように思えました。読めなくて、そこに置いてしまうよりありませんでした。それから半年して、「京都漫画博物館」が、新里堅進を迎えての討論をするということを知り、何はともあれ出掛けることになりました。ちょうど、「ソウル・サーチン」/『沖縄を描き続ける男・新里堅進作品選集および評伝』(評伝、藤井誠二、編・安東崇史、リイド社)の発行に合わせての討論会だったようです。

そこで、新里さん自身も語っていたのは、たとえば「先へ読み進みにくい」それは、沖縄戦の『真実』を描きかけた」という言葉に尽きるように思えました。後に入手することになった、「ソウル・サーチン」/沖縄を描き続ける男・新里堅進作品選集および評伝、「編者による評論」で、編者の安東崇史が、以下のように書いている「真実」です。「…新里が約半世紀の画業の中で続けてきたのは、自分自身が生まれ育ち暮している沖縄を記号としてではなく、そこに生きている／生きていた人の数だけのリアリティを帯びた『人間の土地』として描くことであつた」「その圧倒的なリアリズム」。京都の討論でも、新里さんは、そのように語っていました。たとえばペリリューは漫画で描かれたり、パプアニューギニアの報告もありますが、その「真実」の部分はどこにも、誰にも描き切れてはいないように思えます。

「こうちゃん」(河出書房新社)で出会ってファンになった須賀敦子。どこからあの、文章・文体が生まれてくるのだろうと、手当たり次第に読んできた須賀敦子の文章・文体で、久しぶりに読むことになったのが「地図のない道」(新潮文庫)です。

(次週につづく)